

「小鳥の交響楽」と異民族の言葉

——火野葦平『異民族』試論

解 璞

一 はじめに

火野葦平の『異民族』は一九四九年九月号の「思索」に発表され、翌年三月に単行本『青春と泥濘』（六興出版社）に収録された。『異民族』は、前年に連載されたはじめた『青春と泥濘』の統編の形を取っている。『青春と泥濘』は前線を舞台にしており、『異民族』は、前線と後方との中間劇場を舞台にしている。さらに、加美川中尉などの「青春と泥濘」後半の脇役が、『異民族』においては主役として登場し、『青春と泥濘』と同じ段落、または微細に変更された文章は、そのまま『異民族』にも書き込まれている。両作品は、合わせてインパール作戦をより立体的に示そうとしているのだ。

従来、火野葦平文学については、『麦と兵隊』をはじめとする兵隊三部作などの戦時中の作品に関する論考がほとんどだった。また、石川達三『生きてゐる兵隊』との対比から『麦と兵隊』を考察する研究は少なくない。一方、『青春と泥濘』などの戦後作品に関して、池田浩士によって「戦争のなかの人間を描く火野葦平の諸作品のうちで、もっとも重要な成果のひとつであるのみならず、近・現代の

日本社会が生んだ数多の戦争文学のなかで、いまなお読むにたるものたりえている」と高く評価されつつも、具体的に考察する研究は未だにない。『青春と泥濘』と併載された『異民族』については、中編小説であるためか、等閑に付されている状態である。

その原因として、戦後、火野葦平は文筆家の追放指定（一九四八年五月～一九五〇年十月）を受け、厳しい批判を受けたことが考えられる（『火野葦平年譜』『現代文学大系四十五 尾崎士郎 火野葦平集』筑摩書房 一九六七年九月）。また、『青春と泥濘』『異民族』などの戦後の作品は、『麦と兵隊』ほど読まれていなかったことも一因であろう。しかし、これらの戦後の作品は、『麦と兵隊』以下の兵隊三部作とはまた違った意味で価値を保ちつつ、後世に問題を提起しつづける」とも評価されている。さらに、後述するように、インパール作戦においては、火野葦平が作家として唯一従軍していたため、火野が描いた『異民族』と『青春と泥濘』も、インパール作戦を記した数少ない文学作品として貴重だと言える。

本稿では、『異民族』における「小鳥の交響楽」に注目し、鳥の鳴き声と異民族の言葉との関係を分析する。まず、「小鳥の交響楽」

が生まれた理由とその働きを考察する。次に、小鳥の鳴き声と同じくカタカナで記された異民族の言葉进行分析する。最後に両者の対比で浮き彫りされた戦争の不条理と人間の滑稽さを検討する。それによって、動物を用いて人間を描く火野葦平の文学の新たな可能性を探っていく。

二 混在した民族と唯一の従軍作家

作品を検討する前に、まず「異民族」に描かれた戦争の背景を確認しておきたい。この作品で描かれたのは、一九四四（昭和十九）年三月のインパール作戦である。インドとビルマの国境で行われた作戦だったため、様々な民族の兵士が混在している。インドでは、戦争の二、三年前「インド独立を目指し」、一九四一年二月、マレー半島で「印度国民軍が創設された。一九四三年には「民族運動指導者チャンドラ・ボースが司令官となり、日本軍に協力しインパール作戦など」を戦った。ビルマでは、「はじめは日本軍を解放軍として歓迎し、独立のために積極的に日本軍に協力したが、日本の圧制への不満がつのり、インパール作戦後日本軍が潰走しはじめると、ビルマ軍は反乱を起こして連合軍とともに、日本軍をビルマから駆逐する戦列に参加するにいたった」という。ビルマ人も、結局日本のビルマ侵入が「対英戦争のためにビルマを利用したにすぎないことを看破したのだ」という。また、インド人とビルマ人のほかに、ゴルカ兵も作品に登場し、日本軍とともに行動しているが、実際、ゴルカ兵は、「イギリス軍のネパール人傭兵、ゴルカ兵ともいう。勇猛な兵としてその名が知られている。インパール作戦では日本兵の前に立ちふさがり、その侵攻を阻んだ」という存在であった。こ

三 小鳥の交響楽

三の一 小鳥の交響楽と「無駄の大切さ」

『異民族』においては、小鳥の鳴き声が最も重要なモチーフとなっている。例えば、冒頭では、矢野軍曹と田谷上等兵が毎日のように、「小鳥の判定で、問答をし、賭け」をしている。結末でも、死んでいく加美川中尉の死に際に「小鳥の交響楽」が奏でられている。「小鳥の交響楽」は、作品の全体を貫いている。

冒頭では、まず小鳥の区分と人間の区分が対比されている。ビルマの森林に入った当初、田谷上等兵は、小鳥の名を知ろうとして、チン兵「一人一人」に小鳥の名を聞いたが、「全部チオ」だという。また、花の名も「どれもこれも、パ」（第一章）という。「全部」「どれもこれも」とあるように、チン兵にとって、小鳥や花は、個性ではなく、種類として認識されている。あるいは、日本兵が異民族の言語と考え方が分からないからこそ、このように思い込んだのかも知れない。

一方、日本兵にとっては、チン兵もゴルカ兵も「一様に黒くよれた、眉のひらいた下品な顔」（第一章）を持っている。日本の仁木軍曹にとっても「毎日の実務にもかかわらず、どれもこれも似たりよつたりのチン兵たちの顔と名を憶えることは、容易ではなかった。」（第三章）と描かれている。「一様に」「どれもこれも似たりよつたり」とあるように、チン兵たちの顔と名も、「一人一人」という個性ではなく、民族として認識されている。したがって、日本兵にとっての異民族兵は、異民族兵にとっての小鳥に似たように、個

のように、日本兵、イギリス兵のほかに、インド兵、ビルマ兵（作品ではチン兵）、ゴルカ兵など少なくとも三つの民族は、日本兵の身近にいたのだ。

民族の混在した戦況が複雑なわりには、それを記録する従軍作家は、極めて少ない。高崎隆治によると、「開戦時の文学者たちの徴用期間は一年間だから、元ビルマ班の作家たちは、一九四四年春から夏にかけてのこのインパール作戦にはすでに内地へ帰還していた。したがってこの作戦で日本軍が潰滅的な大打撃を受けた状況は知っていない。知っていたのは作家としてただ一人この作戦に従軍した火野葦平だけである」と記述されている。また、火野葦平は、四月二十九日にラングーンに到着したが、「五月六月と経つうちに戦局が逆転し」「いまにも陥ると言はれたインパールがだんだん陥ちにくくなってきて、最後には如何に力攻を加へても最早如何ともなし難いといふやうな残念な状況になった」と回想している。

このように、敵か味方か比較的明確に分けられる戦場とは違い、インパール作戦には、様々な民族が巻き込まれている。「異民族」においては、後方に近い中間駅にいる日本兵と様々な民族との関係が浮き彫りにされている。これらの異民族は、第三者として戦争に巻き込まれ、戦争で不条理な死を遂げ、また日本兵に対しても同じく不条理な行動を取らざるをえない。時には日本兵とともに戦い、日本兵の代わりに命を失い、時には日本兵と連れ立って前線から逃れる。時にはスパイとして殺され、時には一変して日本兵を殺すようになる。「異民族」は、このような様々な民族が混在した状況を前景として描いた点においても、独特な作品だと言える。

性のない種族だとしか認識されていないのである。

個性を無視し、種族としてしか人間を認識できない戦場で、田谷上等兵は小鳥を「自分で研究することにした。田谷は鳴き声を鳥の名にし、「小鳥表」を作る。小鳥の形と色と寸法のみならず、鳴き声を書き留めた小鳥表は、次のように描かれている。

それは、まるで、交響楽だ。「ケッキョ、ホーチャホ」「プッ、プッ」「チャカホコジャー」「リ、リ、リ、リ」「ゴッコ」「ベヨ、ホーチャカホ」「チ、チ、チ、チ」「ポッポーホオイ」「チュク、チュク、チュク」「ツツチイロ」「テックワクワクワ」「チイヨ、チイヨ」「コワオ、コワオ」——およそ三十種類ほど。この無用な調査をする田谷上等兵を、矢野軍曹はいつも、暇人だなあといつてからかった。田谷の方も、もはや小鳥の知識なら全軍随一、博士論文を出してもいいなどと吹聴するのである。（第一章）

「三十種類ほど」の鳴き声を集めた田谷の小鳥表では、まるで「交響楽」のように、様々な鳴き声が響き合っている。田谷も「小鳥の知識なら、全軍随一、博士論文を出してもいいなど」と自慢している。しかし一方で、このような調査は、戦場では「暇人」による「無用」なものにすぎなかった。後にもあるように、田谷を小鳥学の権威にしたのは、「凄惨としかいえないような前線の犠牲性と、うごきのとれぬ交感状態にもとづく後方のやむなき単調の日々、焦燥と退屈まぎれ、そして単なる気まぐれにすぎない」のだ。さらに、この「無用」な小鳥表と呼応するように、後の第六章では、「無駄」

が繰り返されている。インパール作戦の最高指導官たちが前線視察から加美川中尉のいるタイデムに来た際に、「村夫子然」の瀬川中尉は「無駄の大切さ」を四回ほど能弁に説いていた。しかし、聞く側には、「なんの意味かわからなかつた」、高級参謀が「いつでも、あれをいわれるのだよ」と注射しても「意味は通じない」と皮肉を込めて描かれている。それに対し、前線から更迭された曾田中尉は、「こんな無茶な作戦はない。自分ははじめから、国境を越えることは反対だつたんだ。だのに、軍司令官は強行した。(中略)全滅することはわかっているのに、面目とか顔とかいつて、突撃の命令を出す。兵隊を殺すばかりだといつてもきかない。」と、「無駄の大切さ」を説く軍司令官の下心を暴いている。

このように、「無用」な小鳥の交響楽は、後方のやむなき「単調」と「焦燥と退屈」で満ちている。「無駄」な日々から、さらに軍司令官が面目を保つために強行した「無茶」な作戦から生まれたものだったのである。カタカナで記された小鳥の鳴き声も、「無用」で皮肉さえ込められた記号になっているのだ。

三の二 小鳥の交響楽と兵隊の死

次に注目したいのは、小鳥の問答をする時の日本兵と異民族兵との関係だ。矢野と田谷の小鳥問答は、普段、兵隊が休憩している際に行われる。本来言葉が通じない日本兵、チン兵・ゴルカ兵などの異民族兵士は、いつも緊張関係にある。しかし、小鳥判定の時に限って、異民族兵は、気を緩め、束の間の安心を感じるようになっていく。というのは、小鳥を見つめると、兵隊たちは戦場の現実——日

ところが、次の瞬間、この無用でありがたい小鳥判定の意味は、一変する。小鳥判定で勝利した田谷は、突然の空襲で命を奪われることになるのだ。田谷が死んだ後の加美川中尉について、次のように描かれている。

田谷上等兵は、鉄兜のうえから、まっすぐに頭蓋骨を撃ち抜かれて、一言も発せずにとぎれていたのである。隊長の青ざめた顔が、怒りの痙攣でふるえた。無言のまま、部下の屍骸をしばらく睨んでいた。叮嚀に、拳手の禮をした。田谷はこっそり自分の説をたしかめるために、小鳥表を眺めていたのである。うか。右手の親指を手帳にはさんだまま、うつぶせになつていた。加美川中尉はその手帳を拾いとつて、ちらつとひらかれている頁に視線を落した。別段読むわけがなく、閉じると自分の図表のなかに入れた。(第一章)

本来、小鳥の問答は、言語の通じない異民族の兵隊にも、神経質な加美川中尉にも、しばらくの安心感と親しみをもたらしものだった。しかし、次の瞬間、それは田谷の死によって恐怖の色を帯びてくる。小鳥判定の楽しみと喜びは、怒りと悲しみに変化したのだ。

田谷の死がきっかけで、加美川中尉は、日本兵が屯営したランザン部落にいるチン土民のオンギンを詰問する。「お前はわが隊の密偵から、敵のスパイになつたのだ、いや、はじめから、敵のスパイだつた」といきなり断罪し、「日本軍獨特の斬首の刑」に処刑しようとする。しかも、チン族の観衆に囲まれて「俳優」のように、オンギンを斬ることにした。

本軍とイギリス軍との対立、日本兵と異民族兵との対立から逃れ、人間対鳥という関係に変化しているからだ。小鳥判定が無用・無意味だからこそ、兵隊は、自分自身の命に直接関係のないことに集中できるのだ。

つき立つた言語の障壁のあなたに、重大な、まかりちがえば生命にかかわるものを読みとろうとする彼等の眼光は、つねに真剣だつた。しかし、いま、二人の日本兵の間ではじまつた問答のいかなる飛ばちりも、自分たちに直接関係はないという安心が、眸をやわらげ、親しいものさえ示している。(中略)大きな赤松の根に腰をおろしていた加美川中尉が、青白い顔を半分綻ばせていつた。神経質な細面の顔は、いつも冷たくひきしまつていて、これまで隊長が全部口をあけて笑つたことを、部下のたれも見た者はない。(第一章)

「つき立つた言語の障壁のあなたに、重大な、まかりちがえば生命にかかわるものを読みとろうとする彼等の眼光は、つねに真剣だつた」とあるように、チン兵たちは、日本兵と言語的コミュニケーションがとれず、つねに日本兵に対して警戒心を持っている。しかし、小鳥判定の時になると、「眸をやわらげ、親しいものさえ」示している。しかも、日本側の冷酷な加美川中尉さえも、「青白い顔を半分綻ばせて」、珍しく、穏やかで柔らかい態度を示すようになっていく。つまり、結果的には、小鳥の鳴き声は、人間の言語を超え、閉ざされた民族間の壁を超え、異なる民族の人々をつなげることができたのである。

このような「傲慢」と「自負心」を持つ将校は、「証拠」がないにもかかわらず、「こじつけ」の「正義」だけで、チン人のオンギンを殺した。しかも、チン兵に対する処刑を「自己陶醉」した「俳優」のように演じ、「彼等に印象づければ足る」という人間の命を道具化する不条理を「彼の正義」としている。このように、日本兵である田谷の死に対する悲しみや怒りに対し、加美川中尉は、チン人の死には冷酷だった。田谷などの日本兵を「一人一人」個性のある人間として見ているのに対し、チン人のオンギンを単なる異民族兵として見ていると窺える。

以上から、小鳥表は、偶然にも日本兵田谷の死に関係し、田谷の死で連鎖的にチン兵オンギンも冤罪で殺された。小鳥の交響楽は、癒しと慰みから、日本兵にとつての悲しみ、異民族兵にとつての恐怖へと変化していくのである。さらに、小鳥の鳴き声と異民族の言葉が重なって描かれているが、小鳥を区分しようとする日本兵の姿勢と、異民族の兵隊を区別せずに殺す日本兵の姿勢が対比されている。このような殺人を、加美川隊長は周囲のチン族に見せつけて「なんら誤るところも、遅疑するところもなかった」「正義」としている。「無用」な小鳥の交響楽が演じられるにつれて、加美川も不条理な「正義」を演じていくのである。

四 カタカナで語られた人間の言葉

「異民族」では、小鳥の鳴き声と同様に、異民族の歌や挨拶もカタカナで表記されている。例えば、チン民族の歌、ランザン部落の酋長の歌、加美川が真似た小鳥の交響楽、オンギンなどの異民族からの挨拶などが挙げられる。これらの歌や言葉は、日本語で書かれ

たこの作品のなかでは、異物のように際立ち、「人間の言葉」というものの自体の意味を問いつけています。

まず、日本人隊長加美川が歌ったチン民族の歌を考えてみたい。加美川は補給を求めため、人食いと言われるナガ族の部落へ向かう。彼は日本兵を率い、「古くからチン族につたわる物騒な戦勝歌」を歌いだす。

ナムテム、タウイ、
イン、スル、ズイ、イン、
シアウ、イウ、ガル、
アー、パサル、リアン、
ロ、カイ、イン、エ、(中略)
ジン、シン、シン、
ジン、シン、シン、エ
カ、カウ、サー、
ジン、シン、シン、エ……(第五章)

これらのカタカナ語は、日本語としては、意味を成さない言葉ばかりだ。しかし、加美川にも異民族の兵士にも意味を持ち、士気を鼓舞するためには充分な働きを果たしている。この歌は、「節はきわめて単調で、どこか角力甚句に似ている。チン人の歌は、戦歌でも恋歌でも、舞踊歌でも、みんな同じ調子だ。それは、どんな小鳥でもチオ、どんな花でもバと呼ぶに似ている。」と説明されている。ここでは、チン人の歌、顔、名前および現地の小鳥や花は「みんな同じ」だという印象が繰り返される。それは、本当に「同じ」とい

実際、同じ加美川によって、「小鳥の交響楽」も演じられるようになった。ナガ族との戦闘に敗れた後、軍司令官を歓迎する宴会の時、加美川中尉も「小鳥の鳴き声の交響楽をやった」と書かれている。「田谷の手帳をいつかすっかり暗記していた」とあるように、加美川は受け継いだのだ。田谷が死んだ直後にも、例えば、チン人の部落で現地の酒を飲んで矢野軍曹に向かって、加美川は「ツツチイロ、ツツチイロ、……」とおどけて鳥の鳴き声を真似るようになった。矢野は、「お助け下さい、田谷の幽霊が出たような気がします」と笑ったが、「幽霊という言葉が、ひやつと氷の針のように、加美川の胸をついた」(第二章)とある。また、チン兵たちが猛訓練をどこされる間に、加美川隊長は「小鳥学の権威」となった(第四章)。田谷の残した手帳で「小鳥たちの形と色と寸法と、その鳴き声とを、いつか知悉する」ようになり、部下をつかまえて、小鳥判定をするようになったのだ。

このように、苦渋に満ちた戦争のなかでは、人間の身体を治療する衛生兵田谷が残した「鳥の交響楽」は、その後も兵隊に心の癒しを与えていると考えられる。

『異民族』では、カタカナ語の歌のみならず、カタカナ語の挨拶もよく用いられている。例えば、処刑される前のオンギンの挨拶は、次のようになっている。

「ケンチジカツカ、ゴキゲンウルワシクテ、ケッコウニゾン
ジタテマツリマス」オンギンは媚をふくんで、日本語で流暢に
いった。県知事閣下——その県というのは、ティディム県である。軍政が布かれているため、特種工作隊長たる加美川中尉が

うよりも、日本兵にはチン族の言語や人間が分からないからだと考えられる。だからこそ、チン族の節と日本相撲の「角力甚句」が比較され、チン族の感覚が、日本的な感覚に翻訳されているのだ。

人の感情に訴える歌は、戦争のなかでしばしば利用されている。インパール作戦の約二年前の一九四二年から、「君が代変奏曲」「愛国行進曲」などのレコードが、「南方建設」というキャッチ・フレーズのもとに、東南アジアの諸国へ輸出された。「ねらいは、日本語の普及と日本精神の涵養である」と述べられている。一九四三年頃から、「謀略レコードの製作」が行われ、「ドイツが欧州戦線で効果をあげた方法に倣って日本も飛行機からレコードをまき、敵軍の戦意阻喪をはかるのがねらいだ」という。ところが、一年後の「インパール作戦の失敗で、謀略レコードも不必要になってしまった」のだ。日本軍歌のレコード制作は、インパール作戦の失敗によって中止されたが、インパール作戦の戦中では、日本軍歌の代わりに、日本人隊長が歌う異民族の戦勝歌が重要な働きを果たすようになってくる。この歌によって、「任務、義務、忠誠、それから快い犠牲の観念、この一挙によって全作戦を支え、有利になし得るとい希望と満足」(第五章)という感覚が日本兵と異民族兵の間で共有され、「観念」によって隊長加美川の希望と満足が支えられた。だが、この「観念」を表現したのは、「ジン、シン、シン」などの無用な「小鳥の交響楽」を思い出させるカタカナ語なのである。

このようなチン族の戦勝歌は、当時のメディア・イベントでよく用いられたカタカナ表記で書かれ、当時の読者に日本のメディア宣伝と軍歌を連想させる一方、前述した「小鳥の交響楽」の無用さも、連想させるだろう。

知事となっていた。みずから任命したことは、いうまでもない。(中略) オンギンの日本語の挨拶は、若干調子がはずれていた。この挨拶だけは、たれも日本語でしやべる。教育訓練係重田曹長が隊長の意を汲んで、熱心に教えたので、東機関にくるチン人は、例外なくこの言葉をおぼえた。これをいうと、加美川中尉の機嫌のよいことも、いつか、チン人たちはのみこんでしまった。しかし、その先は英語でないと通じない。(第二章)

ここでは、日本兵と異民族兵とのディスコミュニケーションが描かれている。オンギンが「流暢に」言ったカタカナの日本語は、鸚鵡返しのような形式上の言葉にすぎず、意思疎通するための言葉ではない。「その先は英語でないと通じない」ため、語学力がそれほどない加美川とオンギンは、うまくコミュニケーションがとれるはずがない。生死にかかわる重大な時であるにもかかわらず、オンギンの言葉は、挨拶のカタカナ語よりも通じにくく、無力だったのだ。さらに、結末では、オンギンの鸚鵡返しのような挨拶は、皮肉にも繰り返されている。加美川がナガ族に敗れ、ランザン部落に逃げ帰った時に、ランザン部落の地雷による「はげしい挨拶」をされるようになった。

つねに堅確に、頑強に、操志かたく、加美川中尉は変化しなかつたが、周囲の状況は、そして、歴史は、新たな運命へ足をふみだしていた。(中略) 「ケンチジカツカ、ゴキゲンウルワシクテ、ケッコウニゾンジタテマツリマス」そういう挨拶を期待していたのに、一発の地雷から、だしぬけに、はげしい挨拶を

されたのである。ティティム県知事閣下は、背に裂傷をうけて、瞬時、気をうしなつた。(第七章)

ここでは、加美川に関する呼称は、「中尉」から、チン族の言う「ケンチジカツカ」を真似た「県知事閣下」に変化している。カタカナで記された形式だけの挨拶は、一瞬で中身が変わり、今まで日本兵の支配下にあり、味方をしていたランザン部落のチン兵は、敵に変化したのだ。日本兵からして見れば、現地の異民族兵は「正義も、義務も、使命も、理解も、そして、愛情すらも、根底的なもの」を持っていなかった。彼らには「勝利も敗北もないのである。ただひとつ平和への希求があつたが、暴風と海嘯のなかで、彼等の方法は、一種のマキアベリズムとなるほかほかあつた」とあるように、本来戦争する意志を持たない彼らにとって、「正義」は、善悪ではなく、平和のみである。

以上のように、カタカナで記された「小鳥の交響楽」も異民族の戦勝歌も、日本人隊長加美川によって歌われ、異民族兵とコミュニケーションが多少できるようになったと言えよう。しかし、カタカナの歌も挨拶も、形式上のコミュニケーションにすぎない。形式上、同じ音で発音できても、日本兵と異民族の「正義」の中身が異なる限り、本当のコミュニケーションは成り立たないのである。

五 「滑稽動物」としての人間

「異民族」の結末では、日本人隊長の加美川は瀕死になつてはじめて、様々な顔が見えるようになった。いずれも異民族の顔である。彼の瀕死の眼には「さまざまな顔が交錯し、重なりあい、近づき、

存在とみなされている限り、(聖書の天使のように)鳥は、いわば現世の束縛(神々が原理的に所有する恵みに相対したときの重圧)から、解放されて自由な神のいきいきしたシンボルである。」と見られている。「鳥は肉体から逃れる魂、あるいは、単に知的機能の相「魂の飛翔」だとも見られている。作品の結末では、「小鳥の交響楽」も、生まれた国・民族に縛られた「肉体」から逃れる魂の自由、「現世の束縛」から自由になる「魂の飛翔」だとも考えられる。

さらに、結末になつて、はじめて加美川にとつて、異民族の様々な顔が見えるようになった。

よごれ歪んだ黒いチン人の顔、ぼんやりと、幻のようにあらわれれば消えたが、加美川は、そのなかに、村長ブンジヤナン、助役クアルザチン、教育主任ブンコハウ、徴募課長トウルカム、小隊長キャンピウ、分隊長タンコリン、トンザン酋長ボンザマン、それから、女の顔、たしかに、オンギンの妹ニアゴ……そして、これまで、味方であつたこれらの多くの顔が、狂暴な憎悪をたぎらせて、自分に殺到してくるのを見た。急に敵になつたのか、はじめから敵であつたのか、ともあれ、いま、彼等は団結して、加美川中尉の身体に、槌、鎌、棒、長刀を打ちかけている事実にあやまりはなかつた。嘗て白々しい無表情の壁であつたものが、どつと落ちかけてきたわけである。(第七章)

「嘗て白々しい無表情の壁」だったものが明瞭な表情を持つ「多くの顔」となっている。異民族の現住民は、これまでの無表情で「二様に」見える顔ではなく、はじめてそれぞれ異なる顔として描

離れて」いる。また、異民族の顔が見えると同時に、加美川の死の耳には「小鳥の交響楽」も、再び聞こえてくる。「蜂の巣のようになり、寸断されてゆく加美川の死の耳に、周囲の騒擾が、快い音楽のようにきこえはじめた。そして、それは、たしかに、あの、小鳥の交響楽であつた。ケッキョ、ホーチャホ、プッ、プッ、プッ、チャカホコジャー」とあるように、ここでは、周囲の異民族の騒擾が「快い音楽」に変化し、異民族の声が小鳥の交響楽に変化した。また、加美川に対する語り手の批判は、明確に述べられるようになる。

崇高な感動のなかに、加美川中尉は浸っていた。死をすでに感じていたが、自分の死の正しさと、美しさとは、この暗愚蒙昧の隊長を、満足せしめた。彼がつねにその行動のよりどころしてきた偉大なる最後のもの、絶対としたものは、空虚で、すでに崩壊し、否、はじめからなかつたこと、彼の一切の営為が無への奉仕にすぎなかつたことなどは、彼の関知するところではなかつた。(第七章)

結末になつてはじめて加美川にとつて、「偉大」「絶対」なもの、は、はじめから「空虚」「無」だったと明言されている。この「空虚」さは、この「暗愚蒙昧」の隊長には、「関知するところではなかつた」のだ。加美川の耳に聞こえた「小鳥の交響楽」は、無意味な「空虚」を暗示しているとともに、死によつてもたらされた「快い」自由だとも考えられる。

鳥というシンボルは、多様な意味を持っているが、鳥が言葉を持つということとは、「一般に信じられている」。また、「神々が飛べるかれるようになった。特に興味深いのは、加美川の身がわりに死んだモンサンカインが思い出される一節である。

たしかに、彼(引用者注…モンサンカイン伍長)は自分の身がわりに死んだのだ。加美川はそのことを疑つていなかった。(中略)彼はそんなに自分を愛していたのか。それとも、忠誠であつたのか。生命を以てするほど。しかし、あのときは、加美川はモンサンカインが、行軍の途中、その武者ぶりを褒めてやつたことで、うれしかつたのだらうと考えた。人間はひとつの微笑のためにも死ぬのである。おだてられれば、どんな危険でもおかす。生命とは偶然にすぎぬ。いま、ここにモンサンカインがいたならば、どうするであらうか。血にまみれた加美川は半唇をひらいて、苦笑した。きつと、皆といつしよになつて、自分を襲撃するだらう。それで、よろしいのだ。(第七章)

モンサンカインは、一回目の遠征(第五章)で加美川に褒められ、加美川を守るために死んだ。結末では、モンサンカインの死は、再び加美川の記憶に戻り、「人間はひとつの微笑のためにも死ぬ」という不条理と滑稽さを物語っている。「ひとつの微笑のためにも死ぬ」「おだてられれば、どんな危険でもおかす」チン兵と同様に、加美川も「偉大なる最後のもの」に讃えてもらいたいという思いで死んでいく。兵士は下士官の、下士官は上官の、さらに司令官は「面目」という国家権力の「ひとつの微笑」のために、自分自身の命を捨て、他人の命も奪ってしまうのだ。しかし、こうした個人間の僅かな善意は、結局、民族間の緊張関係によって抹殺されてしま

(19) 『世界シンボル大事典』(金光仁三郎ほか訳 大修館書店 二〇〇七年七月)

(20) 注十九前掲書。

(21) 注十九前掲書。なお、『イメージ・シンボル事典』(山下主一郎ほか訳 大修館書店 一九八四年三月)には「飛び立とうとしている鳥、または飛んでいる鳥は魂の実体化したものだ。」「人間の魂が鳥の姿になるときは(とくに、溺死した船乗り達の魂が海鳥になったとき)、鳥は罪のつぐないをしているともいわれる」ともある。

(22) このような「壁」は、加美川がオンギンを処刑した時にも登場している。「引用者注・オンギンは」助けを求めようには、部落民の顔を見まわしたが、観衆の顔はにわかに表情をうしなつて、卑屈な無関心があるばかりだった。白々しい壁のようだった(第二章)とある。しかも、観衆のなかには、オンギンの「肉親がいる筈だった。また親戚も友人も、ひよつとしたら妻や恋人もいるかも知れない。しかし、壁のように群衆の表情は行儀正しく、オンギンのために出てくる者は一人もなかった」とあるように、壁は、チン人観衆の無人情や無慈悲を表すというより、日本兵の異民族に対する無理解、または異民族の日本兵に対する声なき抗議だとも考えられる。

(23) インパール作戦では、牛など動物を駆使して物資を運び、死んだ動物を食料にする軍司令官の計画が実施されていたが、予測通りに補給がなされることはなかった。そのような計画があったため、動物もインパール作戦に従軍し、その犠牲となり、特別な位置を占めるようになったと考えられる。

(24) 『現代文学大系四十五 尾崎士郎・火野葦平集』(筑摩書房 一九六七年九月)

(25) 『滑稽憲法』(「警友あいち」一九五四年六月)

※本稿における火野葦平作品の引用は『火野葦平選集』第七卷(創元社 一九五八年九月)に拠った。傍線などは、引用者によるものである。なお、旧字は適宜新字に改め、ルビも一部を除いて省略した。

(かい・はく)

文藝と批評

文藝と批評

第12巻 第5号

第十二巻 第五号 (通巻百十五号)

二〇一七・五

宇多・醍醐朝の文化施策—その史的背景— 荒井洋樹 1

北園克衛『鯤』論 大川内夏樹 13

—「伝統」との関わりについて—

「小鳥の交響楽」と異民族の言葉 解 璞 25

—火野葦平『異民族』試論

江藤淳の憲法改正論 沖野厚太郎 37

〈書評〉

安西晋二著『反復／変形の諸相

—澁澤龍彦と近現代小説—

加藤夢三 65

浅野麗著『喪の領域 中上健次・
作品研究』

加藤夢三 78

中山弘明著『溶解する文学研究
島崎藤村と〈学問史〉』

加藤夢三 83

入会案内 編集後記

2017.5

文藝と批評の会